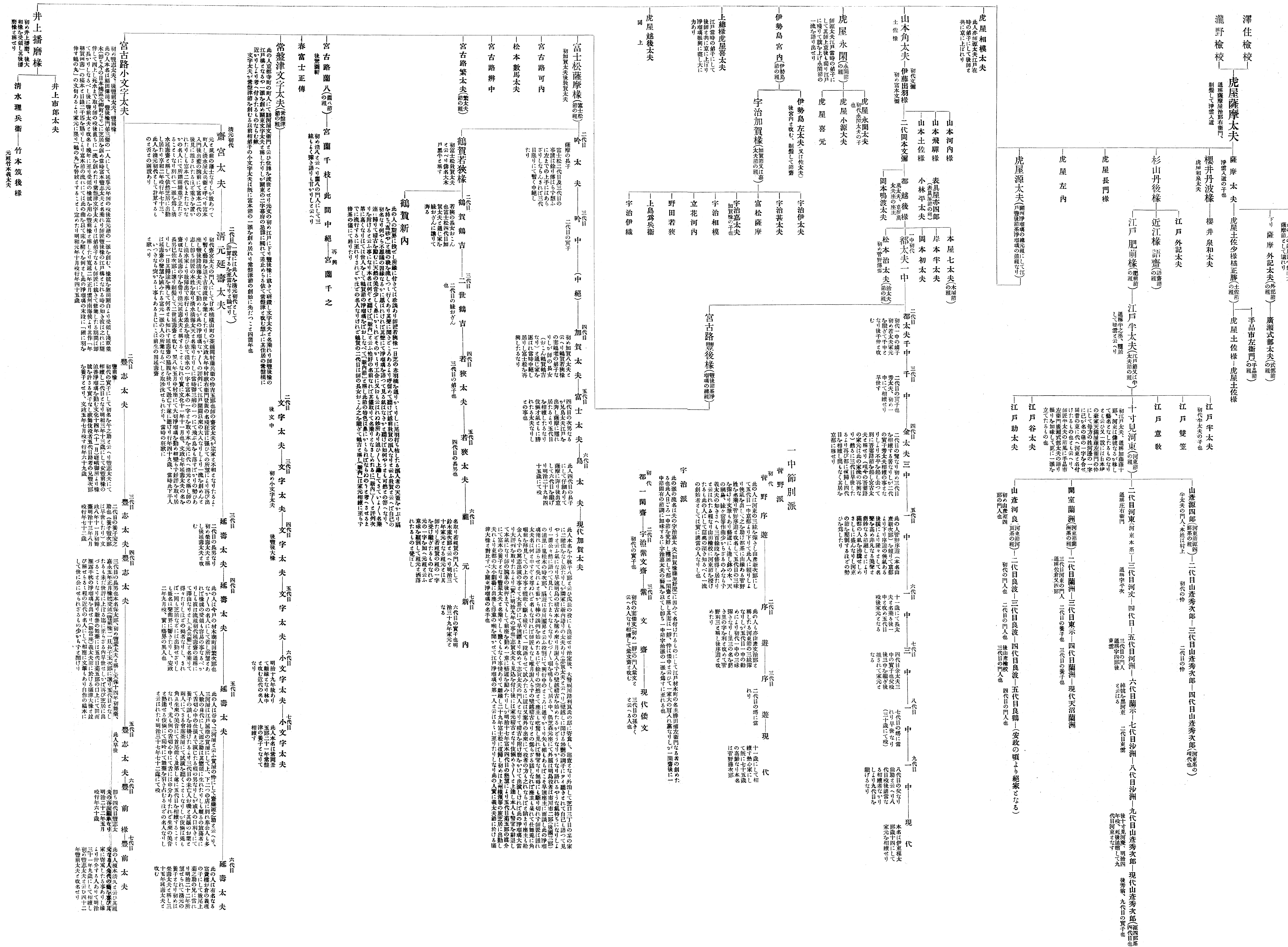
淨瑠璃各派系統圖表

其の一

唄淨瑠璃各派系圖



- 澤住檢校・瀧野檢校
  - 虎屋薩摩太夫（通稱薩摩屋治郎右衛門、剃髮して淨雲入道）
    - 薩摩太夫（淨雲入道の子也）
      - 虎屋土佐少掾橘正勝（土佐節の祖）— 虎屋土佐掾 — 虎屋土佐掾
        - 手品市左衛門（手品節の祖）
      - 大薩摩次郎右衛門（此の人の節風は今尚ほ大薩摩節として遺れり）
      - 下り薩摩外記太夫（外記節の祖）— 廣瀨式部太夫（式部節の祖）
    - 櫻井丹波掾（虎屋和泉太夫）— 櫻井泉和太夫
    - 杉山丹後掾
      - 江戸外記太夫
      - 近江掾語齋（語齋節の祖）
      - 江戸肥前掾（肥前節の祖）— 江戸半太夫（江戸節又は半太夫節の祖）（通稱半之丞、隱居して梁雲と云へり）
        - 江戸半太夫（初代半太夫の子也）
        - 江戸雙笠
        - 江戸意教
        - 十寸見河東（河東節の祖）（初江戸太夫、通稱加藤藤十郎、河東は俳號なるが移して藝名となしたるものなりとも云ひ又一說には日本橋の豪家天滿屋藤左衛門の悴にして母方の姓河邊の一字に己が名の藤の一字を合せ同音の東に代へ河東と名付けたるもの也とも云へり、師匠半太夫の節風に手品市左衛門廣瀨式部太夫の語り振りを加味して更に一派を立てたるもの也）
          - 山彥源四郎（河東節源四郎系の祖）（半太夫の門人、本姓は村上）— 二代目山彥秀次郎（初代の悴）— 三代目山彥秀次郎（二代目の悴）— 四代目山彥秀次郎（河東系の現代也）
          - 二代目河東（河東本系）（通稱庄右衛門）— 三代目河丈（通稱宇平次）— 四代目 — 五代目河洲（三代目の門人通稱宇四郎後東雲）— 六代目蘭示（綽號を黑河東と云はる）— 七代目沙洲（二代目東雲）— 八代目沙洲 — 九代目山彥秀次郎（後十寸見河慶、明治四年歿、死後追贈して九代目河東となす）— 現代山彥秀次郎（源四郎系の四代目也）（後秀翁、九代目の實子也）
          - 閑室蘭洲（河東節蘭洲系の祖）— 二代目蘭洲（三代目河東の門人 通稱佐倉又四郎）— 三代目東示（二代目の養子也）— 四代目蘭洲（三代目の養子也）— 現代天沼蘭洲
          - 山彥河良（河東節河良系の祖）（初め山彥源四郎の門人也）— 二代目良波（初代の門人也）— 三代目良波（二代目の門人也）— 四代目良波（後山彥檢校 三代目の門人也）— 五代目良鶴（四代目の門人也）—（安政の頃より絕家となる）
        - 江戸谷太夫
        - 江戸助太夫
    - 虎屋長門掾
    - 虎屋左內
    - 虎屋源太夫（關西淨瑠璃の總元祖にして江戸豐後節系淨瑠璃の遠祖なり）
      - 虎屋相模太夫（此人亦師源太夫江戸在時の弟子にして後師と共に京に上ぼれり）
      - 山本角太夫（土佐掾）— 伊藤出羽掾（初代文彌 初め富本文彌）
        - 山本河內掾
        - 山本飛驒掾
        - 山本土佐掾
        - 表具屋亦四郎（表具屋節の祖）
        - 小林平太夫
        - 二代岡本文彌
          - 岡本鳴渡太夫
          - 都越後掾（萬太夫、京都萬太夫座の座主）
            - 本屋七太夫（木屋節の祖）
            - 岸本半太夫
            - 岡本初太夫
            - 松本治太夫（治太夫節の祖）（初め菅野傳彌）
            - 都太夫一中（一中初代）
              - 二代目 都太夫千中（初代一中の嫡子初め若太夫家元を繼ぎて千中となり後千仲と改む）— 三代目 千中（二代目の實子也秀太夫、初め一中にて相續せり早世す）— 四代目 金太夫三中（二代目の聟なり初め三代目を相續する筈なりしが二代目の實子秀太夫相續の事となりしより不平を起し去つて別に吾妻路節を起し宮古太夫と稱せり（現今の吾妻路の家元は此の家流の再興なり）然るに三代目早世したるより再び都に復歸し四代目を相續し間もなく其居を京都に移せり）— 五代目 一中（此の人菅野序遊（本名山彥新次郎）を賴りて京都より下り序遊の俠氣ある後援により隆々として名聲を高め非凡なる美聲と微妙なる節廻しとにより滿都の人氣を沸騰せしめさしもに盛なりし河東の節を壓倒するほどの勢ひを爲したり）— 六代目 一中（十一歳にて長太夫と名乘る後一中と改め五代目歿後家元となる）— 七代目 三中（四代目金太夫三中の實子也父歿後三中を繼ぎ後推されて家元となる）— 八代目 一中（七代目の甥に當れり早世なり（三十歳にて歿））— 九代目 一中（八代目の父なり仙助と云へり八代目歿後適當なる相續者なかりしより九代目を繼げるなり）— 現代（本名は伊東楳太郎歳十四にして家元を相續せり）
              - 宮古路豐後掾（豐後節系淨瑠璃の總祖）
                - 富士松薩摩掾（富士松節の祖）（初加賀太夫後敦賀太夫）
                  - 二代目 吟太夫（薩摩の長子 富士松二代目及三代目の事蹟は餘り傳はらず想ふに左までの上手にはあらざりしならんされば三代目限りにて暫く中絕したり）— 三代目 吟中（二代目の實子）—（中絕）— 四代目 加賀太夫（初め加賀八太夫と云へり鶴賀若狹掾の妻鶴老の弟子なりしが師の長女（おこん鶴賀鶴吉なり）と通じ家を逐はれ當時中絕し居りし富士松を再興したるなり）— 五代目 富士太夫（四代目の次男なるが兄島太夫江戸を出奔し薩摩に隱れ居たるより五代目を相續したるなり伎倆才氣ともに勝れたる太夫なりしとの事也）— 六代目 島太夫（此人四代目の長子にして仔細ありて薩摩に奔り後出京して六代目を繼げり明治二十九年四十五歳にて歿）— 現代加賀太夫（此人本名を小林平八郎と云ひ戊辰の役にも出征せり治定後、大警視川路利良氏の邸に寄食し、巡査となり外泊して芝口三丁目の某の家に二階住をなし居たりしが隣家に新內語りの太夫あり（志賀太夫と云へり）壁越しに聞ける妙艶の調子にツイ聽きとれて自己も語つて見やうと云ふ氣になり早速明烏の稽古本を購め來り月謝入らずの壁越稽古を始めたるがどうなりかうなり語れるやうな氣持ちになりしより一番公々然に語つて見たくてたまらなくなりむづ〳〵咽を鳴らして居る中、偶芝森元座にて外題は明烏役者は市川市二郎（後團三郎）の浦里に嵐桂木の時次郎、扇遊は市川團昇と云ふ役割にて興行中のところに通りかゝり矢も楯もあらばこそ早速座主に面談し此の淨瑠璃俺れに語らせて吳れよと藪から棒の談判を始めたるにぞ餘りの突然とて座主も吃驚し見れば警官なり無碍にも斷り切れず師匠は誰れ太夫名は何と申すぞと尋ぬれど名もなければ師匠もなし唯月謝入らずの壁越稽古なりとの僞らざる話しなれば座主も呆れて仕舞兎に角咽前を拜見しての上の事と體能く斷る積りにて一段語らせて試みたるに這は又案外の出來にて役者の方も之れならばと納まり座主も給金入らずの篤志出演の事とて大喜びにて早速纒まり改めて志賀太夫の門人となりて稽古を附け磨をかけて出演しければ此の淨瑠璃大當り大評判を取りたるより（實に明治九年の事也）志賀太夫も見込を付け後には家元稽古となり伎倆めき〳〵と上達し本人も警官を辭退して本氣になり師の腕車の後押までもして前座を勤め一意に藝道を勵みたりしが明治十七年富本四代目の懇望により五代目菊五郎の媒介にて富本の養子となり豐紫太夫と名乘りしも幾くもなく事情ありて離緣し二十九年富士松に復歸し初めは上州橫濱等の旅芝居に出勤し夫れより東都の大小劇場に出座し得意の喉を聞かせて江戸淨瑠璃の第一人と云はるゝに至りたりしなり此の人實に義太夫節に於ける攝津大掾と對比すべき關東淨瑠璃の名手也）
                  - 鶴賀若狹掾（初富士松敦賀太夫と云へり俳名大木戸黑牛と稱す）
                    - 二代目 鶴賀鶴吉（若狹の長女おこん也富士松四代目加賀太夫と通じ家を妹おぎんに讓りて奔る）— 三代目 二世鶴吉（二代目の妹おぎん也）— 四代目 若狹太夫（三代目の弟子也）— 五代目 若狹太夫（四代目の長男也）— 六代目 祖元（名取り若祖賀の門人にして鈴木重次郎と云へり明治三十年家元となる祖元とは其師たりし若祖賀の祖の一字を受け繼ぎたるものなれど元の一字を加へ元祖と云ふ意味を顚倒して祖元と洒落れたるものと覺ぼし）— 七代目 新內（六代目の實子也明治三十九年家元となる）
                    - 鶴賀新內（此の人の斯界に投ぜし所緣に付きては珍談あり師匠若狹掾一日芝の赤羽橋を通りかゝりしに尾羽打ち枯したる浪人者の天蓋をかぶり扇を持ち「高砂や」と橋の袂を流しつゝ行くあり其聲に聞きごころあるより呼留めて聽けば越前敦賀の浪人なりと云ふ敦賀と云へば自己の初名なり何やら不思議の因緣なるかに思はれければ其聲にて淨瑠璃を語つて見る氣はなきかと聽けば如何やうとも可然との答へなり、速に歸りて稽古を勵むに天然の美音少しく鼻にかゝれどそのかゝり工合に又ゐも云はれぬ妙所あり追ひ〳〵上達していよ〳〵名乘りを附けると云ふ事になり本名は何ぞと聽けば「新內」と云ふ恰好の名前なれば其儘取りて名乘りとなさしめたるに「新內」〳〵と評判次第に高くなりては世人をして鶴賀節の淨瑠璃をばおしなべて「新內節」と稱し此節の特色は鼻にかゝらねばならぬの？と考へさせるまでに流行するに至れりされどかほどの名人なりけれど鶴賀の二代目は師の長女おこん之を繼ぎて鶴吉と稱し「新內」は家元相續に至らず傍系の儘にて終りたり）
                - 宮古路可內
                - 松本數馬太夫
                - 宮古路辨中
                - 宮古路繁太夫（繁太夫節の祖）
                - 宮古路薗八（薗八節の祖）（後鶯圖軒）— 宮薗千枝（初め清八と云へり薗八の門人にして三絃もよく彈き語りも甘かりしと云へり）— 此間中絕 — 再興 宮薗千之
                - 春富士正傳
                - 常盤津文字太夫（常盤津節の祖）（此の人京都寺町の町人にて駿河屋文衛門と云ひ位牌を渡世とせり元文の初め江戸に下り豐後掾に就きて研鑽し文字太夫と名乘れり師豐後掾の江戸構となるや一派を創め關東文字太夫と稱したりしが關東の二字幕府の忌諱に觸れて差止めらる依て常盤津と改む想ふに其住居の常盤橋に近かりしより考へ付きたるものならむ歟 文字太夫が常盤津節を創むる以前相弟子の小文字太夫は旣に富本節の一派を創め居れり常盤津節の創始に先だつこと四箇年也）
                  - 二代目 文字太夫（後文中）— 三代目 文字太夫（初め小文字太夫）— 四代目 文字太夫（後豐後大掾）— 五代目 文字太夫 — 六代目 小文字太夫（明治十九年故ありて離緣となり林中と改む近代の名人なり）— 七代目 小文字太夫（此人本名は常岡丑五郎二十一年常盤津の養子となりて相續す）
                - 宮古路小文字太夫（初め豐志太夫、後豐前太夫、豐前掾 此の人本名は福田彈司、豐後掾門弟三傑の一人にして延享元年師の歿後富本節の一派を創む、掾號を鷹司關白より受領し淺草並木（卽ち今の日本橋區元柳町なり）に芝居を創め當時富本豐志太夫と名乘れり師匠豐後掾の江戸構となれる時の如き彼は之れに隨伴して西上し死水まで取り師の歿後直ちに一流を創めたり常盤津文字太夫よりは弟弟子なるも師匠に就きて修業したる期間は却て長かりしなるべし後に豐前太夫と改名し晩年に至り受領の掾號を用ゐ豐前掾と稱したり寬延二年正月雲州南海侯より其作「年朝賀例壽」の稿本と目錄二千匹を賜りしより富本節の流れにては此の曲を以て床を開くを例とし此の淨瑠璃の末段に「國に羽を伸す鶴の丸」の文句あるより家元に限り「鶴の丸」を替紋とすることゝ定めたり明和元年十月歿行年四十五歳）
                  - 二代目 豐志太夫（豐前掾 初代の實子にして初名を午之助と云へり豐志太夫にて相續し二代目となり明和三年十三歳にして父豐前掾の追善淨瑠璃を勤む文化十四年（十一月）嵯峨御所より掾號を許さる實子なし歌舞伎役者五代目路考の兄豐次郎を養子とせり、文政五年七月歿す行年六十九歳）— 三代目 豐志太夫（二代目の養子安之助也（養子豐次郎は早世したり）文政八年十一月初舞臺明治十三年八月歿行年七十二歳）— 四代目 豐志太夫（三代目の長男也本名保太郎、初め豐紫太夫と稱し天保十四年初舞臺、嘉永五年正月掾號受領（豐前掾）一旦長子玉次郎に讓り五代目となしたるも未だ世評に上ぼる迄に至らざる內早世せしかば再び芝居に出づることゝなり其歸り新參の舞臺には五代目菊五郎の口上にて田面雁露手枕の淨瑠璃を出せり（新富座）義太夫節に於ける攝津大掾と竝び稱せらるゝ程の近代の名人にして相應に文筆もあり自作の稿本に [illegible]）— 五代目 豐志太夫（此人早世）— 六代目 豐前掾（卽ち四代目豐志太夫の再度繼承なり 明治二十二年五月歿行年六十歳）— 七代目 豐前太夫（此の人榎本清久 [illegible] 父なる人先代の [illegible] 家に寄寓したる [illegible] より仲介する人 [illegible] 三十一年九歳に [illegible] 初め豐志太夫と [illegible]）
                  - 清元初代 齋宮太夫（元と筑前の藩士なりしが故あつて町人し清水屋太兵衛と呼べり富本入門後出藍の腕前にて富本二代の後見に推されたるほど重きを置かれたりしも富本二代もまたなかなかの名人にて所謂兩雄並び立たざることゝなり別れて一派を爲し清水延壽齋と稱して依然芝居に出勤し居たり享和二年歿行年七十三、此人を清元初代として計算するものと否との兩說あり）
                    - 二代目（一說には此人を清元初代として計算するを至當なりと論ぜり）清元延壽太夫（初代齋宮太夫の門人にして日本橋橫山町の茶舖岡村藤兵衛の悴吉五郎也師の齋宮太夫が宗家と不和となりたるより暫く藝籍を退き古着渡世を業としたりしが文政九年中村歌右衛門登阪の名殘狂言に強ひての所望により再び出座し豐後路清海太夫にて勤めしが此の淨瑠璃なか〳〵の評判にて江戸開闢以來の大入なりしより一流を創めんと志し卽ち師匠の本姓を取り清水清海太夫と名乘りたりしに當時御三卿の一つにて飛ぶ鳥をも落すばかりの勢ひありし清水家より故障出で奉行より差止を喰ひ依て清水の一字と富本の一字とを取り本を元に代へ清元と稱し師の齋號なる延壽の字を借り清元延壽太夫と稱することゝなれり實に文化十一年十一月也、文政七年延壽太夫の名を長男巳佐次郎に讓り剃髮して二世延壽齋と改む、翌八年五月中村座にて大切淨瑠璃を勤め相變らず好評を取り居りしが一日其歸途を擁して何者とも知れず延壽齋の脇腹を抉りて逃亡す遂に逝けり行年四十九歳、當時此下手人は延壽齋の聲望を嫉みたる富本一派の人の所業なるべしと取沙汰せられたり、當時の狂歌に いつきなら突かるゝ事もあるまじにこは前生の因延壽齋 と歌へり）— 三代目 延壽太夫（二代目の長男なり初め榮壽太夫と稱し後延壽太夫と改む）— 四代目 延壽太夫（此の人は今戸の材木商町田繁次郎也なか〳〵の名人にして若し所望とあれば掾號の受領も容易の事なるべかりしも彼は流祖初代延壽齋の通稱にて澤山なりとし「太兵衛」と名乘りて得々たりしほどの拗者なりし、されば一同も芝居などには出勤せざりしも盛名は聲曲界に響きたりし、安政二年九月歿、實に藝界の異人也）— 五代目 延壽太夫（此の人は谷中、三河屋と云ふ質屋の悴にして齋藤源之助と云へり、三河屋は江戸屈指の質屋にして上、下二つの店に別れ奉公人も多人數の身代にして源之助は其惣領に生れたりしも頗ろの放蕩者にて舌切心中の仕損まで演じたる程の男なりしが或人の口利きにて養子の談しを持掛けたるより三代目の未亡人お磯と其娘のお葉と兩人にてさる會席茶屋にて試演を聽くことゝなりしが伎倆は兎も角其生來の美音にて首尾能く及第し遂に五代目を相續することゝなれり、尤も例の舌切心中にて舌には申分ありたれど生來の美音と熟達せる伎倆にて獨吟にて舞臺を引き占むるほどの名人なりしと云はれたり明治三十七年七十二歳にて歿）— 六代目 延壽太夫（此の人は有名なる富貴樓お [illegible] の子に [illegible] 菊之助の [illegible] り明治二 [illegible] 望せられ [illegible] 養子とな [illegible] 榮壽太夫 [illegible] 十五年延壽太夫と改む）
      - 虎屋永閑（永閑節の祖）（師源太夫江戸當時の弟子にして其師上京後も獨り江戸に殘りて旗を上げ永閑節の一流を語り出せり）
        - 虎屋永閑太夫（初代永閑太夫の子也）
        - 虎屋小源大夫
        - 虎屋喜元
      - 伊勢島宮內（伊勢島節の祖）
        - 伊勢島左太夫（又は佐太夫）（後宮內と改む、剃髮して節齋）
        - 宇治加賀掾（加賀節又は嘉太夫節の祖）
          - 宇治伊太夫
          - 宇治甚太夫
          - 富松薩摩
          - 宇治嘉太夫（加賀掾の子也）
          - 宇治相模
          - 立花河內
          - 野田若狹
          - 上島爲兵衛
          - 宇治伊織
      - 上總掾虎屋喜太夫（江戸當時の弟子にして後師と共に京に上ぼり淨瑠璃振興に盡し大に力あり）
      - 虎屋越後太夫（同上）
      - 井上播磨掾（初め井上播磨、後大和掾を受領し其後播磨掾と稱せり）
        - 井上市郎太夫
        - 清水理兵衛 — 竹本筑後掾（元祖竹本義太夫）

一中節別派

菅野派

- 初代 菅野序遊（此の人は河東の三絃を彈きし山彥新次郎にして五代目一中京都より下りて此人に賴りしより俠氣を出して之を助け都系に由緣ある菅野姓を名乘り菅野序遊と改名して五代目の三味を彈けり文筆もあり藝道にも達し鉢の木、天の網島、妹ヶ宿等作曲少からざるのみならず義太夫の如きさへも三百餘段を修得し居たりと云はれたる程なり山田檢校に河東節を授けたるも此の人にして蘊奧の深きを知るべく一流の創始者としては實に適當の人なりし也）— 二代目 序遊（此の人も亦山彥文治郎と稱したる河東節の三絃彈なりしが五代目一中の勸めにより初代一中の三味彈きなりし里三の名を襲ぎ里の字を利と改めて菅野利三と稱し後序遊と改めたり）— 三代目 序遊（二代目の甥に當れり）— 現代（十一歳にして相續す熱心家にして旣に七十五歳の高齡なり本名は菅野藤次郎）

宇治派

此の派の流名は夫の宇治嘉太夫（加賀掾藤原好澄）に因みて名付けたるものにして江戸材木町の名主勝田權左衛門なる者の創めたる也此人日ごろ一中節を愛好し隱居して都一閑齋と稱し其妻は一靜、悴は倭中と云ひて一家大の肩入れ黨なりしが一閑齋後に一中節固有の節調に加味するに宇治嘉太夫の藝風を以てし卽ち一中節宇治派の一派を爲すに至れる也

- 初代 都一閑齋 — 二代目 宇治紫文齋（初代の實子也）— 三代目 紫文齋（初代の妻倭文（初め一靜）の門人紫文と云へる人なり相續して紫文齋と改む）— 現代倭文（三代目の孫きくと云へる人也）